

## 棕の道草 第1回 「わたしの”代表の一句”」

岡村 潤一

### 思ふことかがやいてきし小鳥かな

代表がまだ立川にお住まいの頃であったと思うが、人が集まる場を築き、育んでいきたいという話を伺ったことがある。

揚句から代表のその思いが、思い出された。代表の胸の中で、あたためてこられたものが具体的なイメージとして明確になった瞬間なのかもしれない。

「小鳥」は代表の思いが具体化されたことへの祝福とも言えるのだろう。

### 白髪を連ねてゆきぬ草の王

揚句は代表の最新の句集のタイトルにもなっている。草の王は、名栗の吟行コースでも春から秋にかけてみられる黄色の花。

代表は句にもあるように、いつも吟行では列の先頭である。句会のメンバーに、今日の吟行コースを告げられ、どんどんと軽いフットワークで進んでいかれる。

吟行の途中で、何かが発見されると代表を囲んで人の輪が生まれ、そこでようやく私はメンバーの列に追いついていた。

関西に引越しをして、そんな家族のような温かい名栗での句会には参加できなくなったが、この句を読む度に名栗の光景が蘇る。

「白髪を連ねてゆきぬ」には、俳句を通して、棕の人たちと共に楽しみ、学び成長していきたいという代表の基本姿勢が流れている。

句集「草の王」のあとがきにも揚句に対応した内容で終わっている。

代表とは年に1回程度しか会えないが、棕誌を通して、代表からのメッセージを受け止め、白髪混じる一員として、列に遅れながらも歩んでいこうと思う。